

英語教育と世界の平和についての一考察¹

荒井 圭子

び やがて人類はひとつであることが認識され確立されるであろう。．．．国家及
民族間に存在する差別はすぐにも消滅し、神より授けられた宗教の原理、即ち人類の同一性と連帯性が確立しつつある。²(Abdu'l-Baha, *The Promulgation of Universal Peace*, p. 66)

緒言

世界 16 の国々の協力によって 2006 年に完成が予定される宇宙ステーションが象徴するかの如く、21 世紀を目前とした世界は、政治、経済、科学、通信等、あらゆる分野において国境を超えた地球規模の協力と統合が促進されており、「人類の同一性」が現実のものとなりつつあることを目撃する思いのする昨今である。一方このような世界の動向と時を同じくして、言語学・遺伝学等の異なる分野においても、例えば、最も複雑な言語の多様性はアフリカの言語に確認することができ、同様に最も複雑な遺伝子における多様性もアフリカに住む人種に確認されること、また最古の人類の遺跡は現在のところアフリカから発掘されていること等に基づき、現代人類(ホモサピエンス・サピエンス)はアフリカの同一の祖先にその起源を求めることができるという「脱アフリカ説」が有力になっている(Ruheln,1994; Dawkins,1995)。世界に約 5,000 存在するといわれる言語もかつては一つの言語グループに属していたことが推測され、その言語的近似性と民族間の遺伝子的近似性が驚く程一致することも報告されている(Ruheln,1994)。ミトコンドリア DNA によって人類の祖先である女性(Eve)がアフリカで発見されたというニュースも記憶に新しい。このように、複数の分野において人類の起源は同一ではないかという研究結果が報告される中、あたかも壮大で求心的な「世界を統一する力」³(Quirk,1981, p154; Crystal, 1990, p274)が働いているかの如く世界がグローバル化していく様は、驚きの念を持って観ずにはいられないことであり、人類はひとつであるという思いを一層深くするものであ

¹ この論文は、1999 年度全国語学教育学会において発表された原稿に、多少の変更を加えたものである。

² 筆者訳。英語原文：The oneness of humanity shall be recognized and established.....The differences existing between nations and peoples will soon be annulled, and the fundamentals of the divine religions, which are no other than the oneness and solidarity of the human race, are being established.

³ 筆者訳

る。しかしながら、その一方で異なる民族・宗教の対立による戦火は絶えることがなく、貧困や飢餓、著しい人権迫害等の下に生活する人々が数多く存在することも事実である。

このような世界においては、異なる国・地域間におけるコミュニケーションを実現し、環境問題をも含めた地球的規模の問題を解決して平和な世界を構築するために共通語を使用することが必要であるが、そのことの「便宜性は多くの人々によって認めらるに至り」(Crystal, 1998, p25)、現在その役割を担っている言語が英語であると言える。従って、現代における英語は二面性を持っていると考えることができる。即ち第一に、英語は、他の全ての言語が皆そうであるように、人間が人間として存在するための真髄ともいえる言語であるということ、第二に、英語は、単に世界に多く存在する言語の一つであるというだけでなく、世界共通語として存在するということである。従ってこのような新しい時代における英語教育の有り方は、自ずと従来のものとは異なってくるものと思われる。Strevens が指摘している(1992)ように、外国語の一つとしての英語教育と世界共通語としての英語教育には違いがあってしかるべきである。本稿においては、英語がこのような二義性をもつ存在であるという視点に立ち、先ず、人類が一つであることを認識できる時代を迎えつつあるという点に鑑み、人間とはどのような存在であるのか、次に、英語は言語であるという観点より、人間が言語をもつということはどのような意味をもつのか、そして、英語を世界共通語として学習するという観点より、その意味と意義は何であるのか、最後に、このような二義性をもつ英語の教育はいかなる方向性をもってゆくべきかについて考察してゆきたい。

言語について

人間とは

人間の特質を示すものとしてまず象徴性を所有することを挙げることができる (Deacon, 1998)。考古学者 Tattersall は、ヨーロッパに残るラスコーの洞窟等に描かれた壁画には、芸術性・象徴性・表記性が既に顕著に現れていることを指摘している (1998) が、このことは、人類が極めて初期より言語の特性である任意性と象徴性を用いることにより、自然及び自らの心の内に存在するものを壁画の中に表現していたということを意味する。またもう一つの特徴として、人間は自己の意識を持ち、それをフィルターのように入れて外界を認識し、それに基づき対処していくということを挙げることができる。このような象徴性と自意識をもつことにより、人は、物理的に眼前に存在しない事柄についても構想・思考し、過去の歴史を振り返り、また、未だ来ぬ未来についても想いを馳せる。即ち、これらの特質は、人が、時間と歴史の流れやまた自然と空間の中に自己の存在を確認・認識し、理想や目標を掲げることが可能にするといえる。

言語と人間

Wittgenstein は、「世界とは自分の把握するところの世界であり、このことは、自分の言語の限界が自分の世界の限界であるという事実によって明白である」⁴ (1976, p93)と、人

⁴ 筆者訳

間の理解と言語、人間の内世界と言語との深い関係を洞察しているが、同様にデカルトの言う「われ思う、故に我あり」という思考する存在としての人間も、言語なくしては把握することはできない。また、Pinker は人間の心の働きを多方面より科学的に分析した上で、科学では説明できない要素として、自意識、自由意思、道徳性、意味の理解、人間の知識等を挙げている(1997)が、科学的に証明することのできないこれらの要素も、その実態を言語化することは可能である。このように、「人間の存在は、言語を所有することから切り離しては考えることはできず」⁵(Evans, In Falk, 1994, p78)、言語を所有し使用することが人間存在の真髄であると考えることができる。

言語と思考

一般に言語とはコミュニケーションの手段であると言われる。しかしながら私達は、言語以外の手段、例えばジェスチャーや顔の表情等によってもコミュニケーションを図ることが可能であり、Fromkin と Rodman が指摘している(1993)ように、もしも言語がコミュニケーションの手段としてのみ捉えられるのであれば、他の多くの動物もコミュニケーションの手段を持つということが出来る。言語によるコミュニケーションと、動物によるコミュニケーションとの違いについては、例えばコミュニケーションとしてよく知られる蜂のダンスと比較しても明白なように、動物によるコミュニケーションには創造性が欠如しており(Fromkin, Rodman, 1993; Bolton, 1994)、また、チンパンジー等の類人猿のコミュニケーションであっても、それらは感情と本能に直結したものであり(Vygotsky, 1986; Lieberman, 1998)、眼前の事柄についての固定化したメッセージであると考えられる(Aitchison, 1996)。一方、人間の言語は、客観性を持ち(Vygotsky, 1986)、直接経験していない事柄についての認識行為であり、また、思考し論理を構築するための媒介であり且つそれを他者に伝達するための手段であるというように、言語と思考する存在としての人間の関係が多く言及されている。(Bysrson, 1990; Fromkin & Rodman, 1993; Jackendoff, 1994; Thomas, 1994; Pinker, 1994; Falk, 1994; Bialystok & Hakuta, 1994; Geirsson & Losonsky, 1996; Sellars, 1996; Frawley, 1997; Tattersall, 1998, Lieberman, 1998)。Vygotsky は更に、「言葉は人間の意識の縮図である」⁶とも述べている(1986, p256)が、この言語と意識・思考との関係は、ヘレン・ケラーが、失明した後初めて水という物質が水という名前(言葉)をもっていることを理解した瞬間を回想した記述の中に、最も強烈にまた最も感動的に見出すことができる。

その瞬間、言葉の持つ神秘が明らかにされました。私は、水という言葉は、私の手が触れている冷たい何かを意味することを悟り、その生きた言葉に私の心は目覚め、言葉は、心に光と希望と喜びを与え、私は初めて自由を得ました。突然私は、全てのものが名前を持ち、その一つ一つが夫々、新たな思考の扉を開くということを漠然と感じました。⁷ (In Aitchison, 1996, p96)

⁵ 筆者訳

⁶ 筆者訳

⁷ 筆者訳

言語と倫理性

言語は、人間のもつ倫理性・道徳性とも深く関わっている。Lieberman は、人間のように複雑な精神と知能を持った社会集団には道徳が必要であり、実際道徳は人間の文化の中に常に存在してきたが、それを可能にしてきたものが正に言語であったことを指摘し、その例として13世紀の元を挙げている(1993)。即ち、モンゴルにおいては、伝統的にその戦略は残酷を極めていたが、ジンギスハンの孫であるフビライハンは、マルコポーロも記しているように大変慈悲深い政治を行なった。これはラマ教の僧侶が彼に言葉によって仏教における徳を説得したからであるとされている。このように人は、多くの場合言葉を通して徳を学びそれを習得する。このように言語は、人を説得し、その行為までを変えてしまう大きな力を持っている。Aitchison は、このように人を説得し影響するという言語の役割は、単に情報を伝達する手段としての役割よりも重要であるとしている(1996)。

言語とアイデンティティ

また言語は、個人のアイデンティティを表すものでもある(Kachru,1985; Greenbaum,1990; Bailey,1991;McCrm,Cran, & MacNeil,1992; Strevens,1992; Clark,Eschholz,&Rosa,1994; Bialystok & Hakuta,1994; Daniels,1994)。この場合のアイデンティティには、個人としての自己を表すアイデンティティと、社会またはその言語を用いる集団に属するというメンバーシップを表現するアイデンティティという異なる二つの側面がある。即ち、言語は社会の一員としての自分の基盤であり、同時に自己という意識にも深く結びついている(Bailey,1991)。また、「言語は人格を構成する中心的要素であり、それを使う人 及びその人が理想とする姿をも反映する鏡である」⁸(Daniels,1994,p30)とも言うことができる。更に、Clark や Eschholz, Rosa らが指摘している(1994)ように、同一言語を用いるということには、国境を超えて人々を互いに結びつける力を持つ。グローバル化が進行する現代においては、このことは特に注目するに価する。何故ならば、一つの言語を地球市民のための共通語として意識した上で使用する時、人は自己が地球市民であり、同じ共通語を用いる者は皆同じ集団に属することを認識し、そのことによって連帯性を高めることが可能になるからである。

言語の習得

最後に、母国語を習得する場合と外国語を習得する場合を比較することにより、言語の習得と人間の成長という側面について触れておきたい。まず、子供が母国語を習得する際には、言語の習得と人格形成をも含めた人間形成という広い意味での学習が同時に進行する(Snow,1989)。一方外国語を習得する場合には、学習を通してその言語を用いる文化に接触することにより、その過程及び結果において複数の視点と価値観を発達させることが可能となる(Bialystok,Hakuta,1994)。

言語を用いて

以上述べてきたように、人類はひとつであるという観念を認識することが容易となりつつ

⁸ 筆者訳

ある一方で、地球的規模の様々な問題に直面している現代においては、言語・思考能力を持つ人類は、Lieberman が提言しているように、人類のみが所有する言語のもつ意味を再認識し、その特異な能力を用いることにより、地球的規模の問題を解決してゆくことが大切である。「人間の存在目的は、授けられた言語と思考の能力をもって、愛の精神と命の繁栄を高揚・促進し、不必要な苦しみと暴力を根絶し、更に高度な倫理を達成することである」⁹(Lieberman, 1998, p151)。

世界共通語としての英語

英語の中立性

世界共通語としての英語の特質として第一に、中立性をもつことが挙げられる(Kachru, 1985 & 1986; Bryson, 1990; Bailey, 1991; Fishman, 1992; Strevens, 1992)。そもそも英語は、19 世紀における英国の植民地政策の下に普及したという歴史的事実はあるが、現在国境を超えて使用される場合の英語には、文化・民族性・政治等の固定観が無くなってきた事が注目される。即ち、英語は、「国籍及びその普及の歴史的背景と関係のない言語」¹⁰となり(Strevens, 1992, p31)、宗教や民族のグループから独立した中立性を示す言語として使用されるに至っている(Kachru, 1992)と捉えることができる。そして、このような地球的規模の共通語として、それを母国語とする人を交えない場面においても使用されているという点に大きな特徴があり、赤十字社や国連の活動のように、国境を超えた救済活動等の人道的目的を達成するために必要な共通語として、世界中あらゆる場所において英語が使用されている。このように英語が広く使用されるようになったことにより、今や英語を母国語・公用語、或は外国語として常時使用する人の数は、10 億人余りであると見積もられ(McArther, 1987; Strevens, 1992)、英語が堪能である人をも含めると、その数は世界人口の四分の一(約 15 億)にも達すると推定される(Crystal, 1998)。Crystal は、英語を使用する最大国のアメリカ合衆国の人口が、世界で英語を使用する総人口の僅か 20% にすぎないことに言及し、今や「英語の所有権は喪失されつつある」と述べているが(1998, p130)、これは示唆に富んだ指摘であると言えるのではないだろうか。

世界共通語の概念

このような世界共通語の概念は、実は現在に生まれたものではないということも今後の英語教育の方向性を考える上で重要である。この世界共通語の概念は、旧約聖書に記されているバベルの塔の記述にみられるように、また、19 世紀においてウェブスターが、「言語の多様性は人類が社会の営みの中で直面する最大悪の一つであり、のろいであるとも言えるかもしれない。」¹¹(In Bailey, 1991, p94)とさえ述べているように、言語的多様

⁹ 筆者訳

¹⁰ 筆者訳

¹¹ 筆者訳

性は人類の共存にとって負の要因であるという考えを背景にエスペラント語が作られるなど、それを克服しようとする試みとして生まれたものである (Bailey, 1991; Kachru, 1992)。従って、世界共通語の出現については、Kachru が指摘しているように、「文化の違いを超越した言語の出現を夢見たルネッサンス以来の世界的思想家の夢が実現しつつある」¹² (1992, p4)と認識することができる。即ち、世界共通語は、国境や文化の違いを越えた個人、即ち地球市民の誕生とその確立を助け、またそれを象徴する存在であると考えることができる。

英語教育の取るべき方向性について

学習内容の重要性

第一に、言語は考えを構築し伝達する手段であるという観点より、英語教育の場においては、考える動機と機会を提供し、その上で学習者が自己の考えを英語で表現しそれを伝達する、即ち他の学習者と考えを交換する練習の場を多く設けることが必要である。またその内容が、母国語を習得する場合と同様、学習者を、知識・教養・倫理観という面においても刺激し啓蒙するものであるならば、人格の形成や広い意味での学習及び教養を高めることにもなり、先に触れた母国語の学習過程に通じることであり、Swain が指摘している (1996) ように、それは語学の学習に真の意味をもたらし、学習者の学習意欲を高めることになると思われる。

第二に、世界共通語としての英語を習得するという観点より、学習の内容は、従来のようにアメリカやイギリスなどの英語圏の国々の文化・価値観を学ぶことに偏重しないことが肝要である。そして、学習の目的は、ビジネスや情報の収集、旅行等の際に役立つというような利便性、有為性のみみあるのではなく、共通語を話すことが世界平和を築く基盤となるという認識を持ち、英語教育の場においても、世界平和の概念を内容として反映させることが必要であると思われる。例えば、国際連合等の国際的組織、世界で起きている戦争、貧困、環境問題等についても学び、学習者の目を世界に向けさせ、問題意識をもたせるということが国際語としての英語教育には欠かせないことであるといえる。

英語学習者のアイデンティティー

また、ある特定の言語を話すことはその個人のアイデンティティーに関わることであり、という観点に立ち、英語は世界共通語であり、それを使う自分は地球市民であると認識することが必要である。そのように地球市民であると自覚した時に、目は自ずと世界に向けられ、普遍的な倫理観や価値観、地球的規模の課題に対する関心・問題意識は更に大きくなるものと思われる。Davidson は、人間が思考する存在であるということに関連して、考えを持つということは根底に信念を持つことが要求されることを指摘している (1996) が、英語学習においても、地球市民としてその共通語である英語を習得することは、地球市民としてのコミュニケーションを実現し、そのことがやがては世界平和の構築に通ずるものであ

¹² 筆者訳

るという信念をもつことも必要ではないかと思われる。アイデンティティについて Crystal は、「世界共通語としての英語を使用するにあたって大切なことは、人々が英語を共通語として使用することそのものにあるのではなく、英語を使用する自分のアイデンティティーをどのように捉え、そのことに満足しているかどうかということである」¹³ (1985,p9)と、英語を使用する際の自己のアイデンティティーをいかに捉えるかが重要であることを指摘している。

英語学習の動機

Gardner によれば、語学学習をする際の動機は大きく二つに分類することができる(1959)。一つは、何か別のことを達成するための手段として習得したいという動機であり、他方は、その言語を話す文化・グループと交流・融合したいという動機である。過去における英語学習の場合には、後者の動機に対する対象は、いわゆる英語圏の国々とそこに住む人々に限定されたわけであるが、英語を世界共通語と位置付けることにより、その対象を世界全体に拡大して考えることもでき、更に、自らを地球市民と認識するならば、極端に言えば、英語を学ぶということは自らの言語を学ぶということにもなり、学習の動機を著しく高めることが可能であると思われる。従って、学習者が英語を世界共通語であると認識することは、学習の動機と意欲を高め更なる習得を促すことになるという観点からも重要である。

結論

以上述べてきたように、私は地球市民社会における英語教育においては、1)言語というものが人間性を表わす真髄であるということ再認識し、2)英語を英語圏の国の言語としてではなく世界共通語であることを確認し、3)英語学習の目標は、語学の習得のみにあるのではなく、学習者の人間としての意識・精神性を向上させ、4)地球市民として平和な世界を考えるための一助とすることが肝要であるのではないかと考える。そして今後の課題は、このような方向性の下、実際の授業においてどのようにそれを反映・具体化し、その中でいかににより効果的に語学習得という目標を達成するかということにある。グローバル化が加速度的に進行する世界における英語教育の重要性を鑑みるならば、Brown が提言しているように、「英語教育にあたる者は、必然的にこの繊細で壊れやすい地球上で人類が互いに交流し、真の善意と平和の意味を確立していく過程を助ける立場」¹⁴ (1991,p257) にあり、このように認識することは英語教育に更なる意義を付与することであり、新たな目標と希望を見出すことになるのではないだろうか。それは、「世界はひとつにして人類はその市民」であり、「人々は世界の如何なる都市を旅しても、あたかも自分の故郷を訪れているかのようであろう」というバハオラの言葉が実現し、その意味を実感できるようになるであろうという希望である。

¹³ 筆者訳

¹⁴ 筆者訳

The earth is but one country, and mankind its citizens.
世界はひとつにして人類はその市民である。(Baha'u'llah, *Gleanings from the Writings of Baha'u'llah*, P249)

The day is approaching when all the peoples of the world will have adopted one universal language and one common script. When this is achieved, to whatsoever city a man may journey, it shall be as if he were entering his own home.

世界の全ての人々が一つの共通言語を採用する日が近づいている。このことが実現されたならば、人々は世界の如何なる都市を旅しても、あたかも自分の故郷を訪れているかのようであろう¹⁵。(バハオラ, *Tablets of Baha'u'llah*, p166)

引用文献

- Aitchison, J. 1996. *The Seeds of Speech*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Bailey, R. W. 1991. *Images of English: A Cultural History of the Language*. Chicago: The University of Michigan Press.
- Bialystok, E. & Hakuta, K. 1994. *In Other Words*. NY: HarperCollins Publishers, Inc.
- Bolton, W. F. 1994. "Language: An Introduction." In Clark, V. P., Eschholz, P. A. & Rosa, A. F. (Ed), *Language* NY: St. Martin's Press.
- Brown, H. D. 1991. TESOL at Twenty-Five: What are the Issues? *TESOL Quarterly*. Vol. 25. No.2.
- Bryson, B. 1990. *The Mother Tongue*. NY: The Hearst Corporation. (*The Canadian Modern Language Review*, 52, 4.
- Clark, V. P., Eschholz, P. A. & Rosa, A. F. 1994. *Language*. NY: St. Martin's Press.
- Crystal, D. 1985. Commentary. In Quirk, R. & Widdowson, H. G. (EDS.) *English in the World*. London: Cambridge University Press.
- Crystal, D. 1990. *English Language*. NY: Penguin Books.
- Crystal, D. 1998. *English as a global language*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Daniels, H. A. 1994. Nine ideas about language. In Clark, V. P., Eschholz, P. A.] & Rosa, A. F. (Ed), *Language*. NY: St. Martin's Press.
- Davidson, D. 1996. Thought and talk In Geirsson, H. & Losonsky, M. (Eds.) *Readings in Language and Mind*. Massachusetts: Blackwell Publishers.
- Dawkins, R. 1995. *River Out of Eden*. UK: Phoenix
- Deacon, T.W. 1997. *The Symbolic Species*. London: W. W. Norton & Company.
- Fishman, J. A. 1992. Sociology of English as an Additional Language. In Kachuru, B. B. (Ed.) *The Other Tongue*. Chicago: University of Illinois

¹⁵ 筆者訳

- Press.
- Falk, J. S. 1994. To be human; Language and the study of language. In Clark, V. P., Eschholz, P. A. & Rosa, A. F. (Eds.) *Language*. NY: St.Martin's Press.
- Fromkin, V. & Rodman, R. 1993. *An Introduction to Language*. FL: Harcourt Brace & Company.
- Frawley, W. 1997. *Vygotsky and Cognitive Science*. Massachusetts: Harvard University Press.
- Gardner, R. C. & Lambert. 1959. Motivational variables in second-language acquisition. *Canadian Journal of Psychology*, 13, 266-273.
- Geirsson, H & Losonsky, M. 1996. *Readings in Language and Mind*. Massachusetts: Blackwell Publishers.
- Greenbaum, S. 1990. Whose English? In Ricks, C. & Michaels, L. (Eds.) *The State of the language*. Oxford: University of California Press, Ltd.
- Dornyei, Z. 1994. Motivation and motivating in the foreign language classroom. *The Modern Language Journal*, 78, 273-284.
- Jckendoff, R. 1994. *Patterns in the Mind*. NY: HarperCollins Publishers, Inc.
- Kachru, B. B. 1985. Standards, codification and sociolinguistic realism. In Quirk, R. & Widdowson, H. G. (Eds.) *English in the World*. London: Cambridge University Press.
- Kachru, B. B. 1986. *The Alchemy of English*, Chicago: University of Illinois Press.
- Kachru, B. B. 1992. *The Other Tongue*. Chicago: University of Illinois Press.
- Lieberman, P. 1998. *Eve Spoke*. NY : Norton and Company.
- McArther, T. 1987. The English Language or The English Languages? In Bolton, W. & Crystal, D. (Eds.) *The English Language*. UK: Clays Ltd.
- McCrum, R., Cran, W. & MacNeil, R. 1992. *The Story of English*. NY: Penguin Books.
- Oxford, R. & Shearin, J. 1994. Language learning Motivation: Expanding the Theoretical Framework. *The Modern Language Journal*, 78, 12-28.
- Pinker, S. 1994. *The Language Instinct*. New York: William and Marrow and Company.
- Pinker, S. 1997. *How the Mind Works*. NY: W.W.Norton & Company
- Quirk, R. 1981. International communication and the concept of nuclear English. In Smith, L (Ed.) *English for Cross-Cultural Communication*. NY: St.Martin's Press.
- Quirk, R. 1985. The English language in a global context. In Quirk, R. & Widdowson, H.G.(Eds.) *English in the World*. London: Cambridge University Press.
- Quirk, R. & Stein, G. 1990. *English in Use*. London: Longman
- Ruhlen, M. 1994. *The Origin of Language*. NY: John Wiley & Sons, Inc.
- Searle. J. R. 1996. What is a speech act? In Geirsson, H. & Losonsky, M. (Eds.) *Readings in Language and Mind*. Massachusetts: Blackwell Publishers.
- Sellars, W. 1996. Language as thought and as communication. In Geirsson, H. & Losonsky, M. (Eds.) *Readings in Language and Mind*. Massachusetts: Blackwell Publishers.
- Snow, M. A., Met, M., & Genesee, F., A. 1989. Conceptual framework for the

- integration of language and content in second /foreign language instruction. *TESOL Quarterly, Vol. 23, No. 2.*
- Strevens, P. 1987. Cultural barriers to Language learning. In Smith L. E. (Ed.) *Discourse Across Cultures: Strategies in World English*, NY: Prentice Hall.
- Strevens, P. 1992. English as an international language: Directions in the 1990s. In Kachuru, B. B. (Ed), *The Other Tongue*. Chicago: University of Illinois Press.
- Swain, M. 1996. Integrating language and content in immersion classrooms.
- Tattersall, I.1998. *Becoming Human*. FL: Harcourt Brace & Company.
- Thomas, L. 1994. Song of the canary. In Clark, V. P., Eschholz, P. A. & Rosa, A. F. (Eds.) *Language*. NY:St.Martin's Press.
- Vygotsky, L. 1986. *Thought and Language*. Massachusetts: The MIT Press.
- Wittgenstein, R. J. Tractatus, London:Routledge & Kegan Paul, London.